

「ひ……っ♡」

ぞわりとした^{くすぐ}擦ったさに、思わず声が漏れた。

複数の手にざわざわと裸の胴体を撫でられる感覚。

冷たい床から背を浮かせて仰け反る少年を、幾人もの^{いくにん}気配が取り囲んでいる。

——人じゃない。

幾多の腕に掴まれ、撫でまわされながら、少年はそんなことを思う。

彼らの顔は四角い布に^{はば}阻まれ見ることができない。この季節にしては暑そうなほど、和服を重ね着している。幾重にも布が重なりもったりとした^{たもと}袂から伸びる、筋肉質な腕々。それらに躰を這われるうち、次第に^{くすぐ}擦ったさの奥に奇妙な疼きが混ざりはじめる——。

昭和××年。

「九州に面白そうな島があるから行ってみよう」

六月も終わろうとする頃。

民俗学者の養父がそう言うので、土曜日の午後に潰す羽目になった。

彼は年柄年中、何か興味をそそられる話を見聞きしては現地に脚を運び、必ず少年を同行させる。いい加減助手を雇えばいいのに、下手に知識のある奴は

同行に向かないんだとか適任がないんだとか言って、相変わらず養子の少年を調査に駆り出している。

急に予定を狂わされるこちらは堪ったものではないが、同行すればついでに望みのものを買ってもらえることも多いし、億劫がりながらも結局はこうしてこの男について来ることになる。

「ほら、あれがそうだよ」

N 県の岬から小型のフィッシングボートを走らせること数十分。

地平線に浮かぶこんもりとした緑の丘を指して養父が言った。

島は地図で見ると南北に長い楕円形で、長径は一キロにも満たない。長い間無人島ではあるが、私有地のため普段は人が入れないようになっている。

「私はいろいろと伝手^{つて}があるからね。特別に入ることができるんだ」

と、子どもじみた顔で笑う養父。

何が原因かよくは知らないが、学会から爪弾き^{つまはじ}にされたあげく大学教授の座を追われた男だ。おそらくろくな伝手^{つて}ではないだろう。

今年五十になるとは思えないほど、好奇心だけで生きている人だった。

子どもじみたその生き方に少年は呆れることも多かったが、夢中になれるものが無い身にしてみれば正直うらやましくもある。別に、真似したいとは思わないが。

教授でなくなっても、彼の本はよく売れた。今年中学に上がったばかりの少年には難しすぎる内容で、それらの本の面白さは正直よくわからないのだけれど。それでも現地に脚を運びまくっているだけのことはあるようで、一部のマニアの間で彼の本はもっぱらの評判らしい。

島に近づき、上陸できそうな場所を探す。

まだ六月なのに、海面からの照り返しも相まって真夏のように暑かった。

養父はごつごつした岩礁に船底が当たるのを恐れ、島から距離をとって移動したので想像以上に時間がかかった。

島の淵は頑健な岩々が連なっており、場所によっては切り立った崖のようになっている。私有地だからという以前に、危険だから普段は人が入れないのだろう。島を見ているとそう思わされた。島の上は強い日差しを遮るほどの、深い緑に覆われている。奥のほうなぞ塗りつぶされたように黒く、じっと見ているとなんだか気味が悪かった。

「何かあったら、これで呼びなさい」

島の様子を見て、さすがに子どもを連れ歩くのは無理だと判断したのだろう。

ボートをやっと平たい岸につけると、養父は持ってきたトランシーバーの片方を少年に渡した。慣れた手つきで受け取ると、少年はストラップに首をくぐらせる。

「一時間後に一旦戻ってくるから」

そう言い残し、彼はいそいそと島の奥へ入っていった。

——それが三時間半ほど前の出来事だ。

「ああ……っ♡♡」

瘦せたあばらを這われた瞬間、また妙な疼きが疾^{はし}り抜けた。

一体、何がどうしてこんなことになっているのだろう。

少年は何本もの腕に押さえられ、仰向けに寝かされていた。両手首を頭上でひとまとめに紐で縛られ、抵抗らしい抵抗もできない。全裸の皮膚に、彼らの纏う服の布が擦れてこそばゆい。

「……っだれ…なんですか……、あなたたち……、」

そう聞いてみたところで明確な答えが返ってこないことは、なんとなくわかっている。それでも恐ろしくて、彼らが一体何であるかを問わずにはいられなかった。

かりぎぬ しょうぞく たて えぼし
狩衣装束に、立烏帽子。

古典の時間に、そういえば習った。平安時代の貴族の恰好だ。

彼らが纏っているのは、それによく似ている。

けれどそれがわかったところで、顔は布に隠れているし、終始無言であるし、やはり肝心なことは何もわかりそうになかった。

結局、あの後養父は一時間経っても船を停めた場所に戻ってこなかった。

どうせ珍しいものでも見つけて夢中になってるんだろう——。そう思い、少年は持参した菓子類を食べながら船の傍の渴いた岩場に腰掛していた。

けれど一時間、二時間経っても戻らないので、だんだんと不安になりトランシーバーのダイヤルを捻^{ひね}る。

ガガ——……、

というノイズ音以外何も聞こえない。

心配だ。

別に、養父のことがではない。自分のことがだ。

少年は養父と違って船舶の操縦はできないし、方角の見方もよくわからない。

もし養父に何かあった場合、もしや本土から離れたこの孤島に何日間も閉じ込められるのではないだろうか——。そんな不安が胸をよぎる。

よくわからない土地で不用意に動き回るのは危険だと、養父には教えられていた。けれど一度不安になるといてもたってもいられなくなり、「少しだけ」と自分の胸に言い聞かせつつ、少年は養父の入っていった雑木林に足を踏み入れたの

だった。

「ひ…♡♡、あ……、あ……、♡」

先程から体内に湧き出してくるこの感覚は、一体何なのだろう。

肌を手で撫でられているだけなのに、^{くすぐ}擦ったさに混ざって甘やかな波がうち広がる。まるで男たちの手が触れる場所に、小さな波紋がたつようだ。

少年がいるのは雑木林の中に忽然と現れた、小さな境内だった。

ここはその中心に据えられた、立派な社殿の中だ。

つい先ほどまで自分は、雑木林の坂を草を掻き分けながら登っていたはずだった。それが、気づいたら全裸で、手を縛られて、こんなことになっている。

自分で思い出しながら、わけがわからないなと思う。

雑木林を歩いていて気づいたらここにいたのに、ここが雑木林の中に忽然と広がる境内だということもわかるし、今自分がいる社殿の外観も頭に浮かぶ。どう思い出しても、頭の中に広がるそれらの光景を自分が見たという記憶は無かった。

それに――。

少年の頭に浮かぶ境内にしろこの社殿にしろ、長らく無人島だったとは思えないほど手入れが行き届いている。

曲がりなりにも学者のもとで育っておいて、非科学的なことなど考えたくはないが——目の前の男たちにしろ、この空間にしろ、この世の道理から外れたものだということを本能的に悟らざるをえない。

では一体なんなのか——？

「あああ……っ♡♡」

首筋を長い指でなぞられ、体内にわたかまる甘い波をつつかれた感じがした。

少年には何もわからない。

この場所が、この男たちが何なのか。

知ってはいけない、という感じも少しは始めている。

この得体の知れない男たち——人間の男の形をしているだけで、中身はそうではないのだろうが——がなぜ自分に対しこんな行いをしてくるのかもわからない。

彼らが自分を撫でまわすのに飽きたら、解放してもらえるだろうか。

恐怖に苛まれながらも意外と頭の芯は冷静で、少年はそんなことを考えた。

その時。

「んっ……っ、！」

足元の男が、唐突に少年の脚の間に割り入ってきた。

「え……っ、え………？」

今までとは違う動きに、困惑する少年。

片方の膝を担ぐように持ち上げられ、もう片足の太腿の下に男の指貫^{さしぬき}を纏った太腿がさし入れられる。

何を好き好んでこんなやせっぽっちの子どもの躰なぞ撫でまわすのだろうと思っていたが、この恰好はもしや——。

「え…っ、あ……、ええ……？！」

酔いが醒めたようになって慌てていると、当たってほしくない予感が的中した。

めく^{めく} 捲られた狩衣^{かりぎぬ}の間から覗く、隆々たる肉の塊^{かたまり}。

他人様^{ひとさま}のものなど、林間学校での同級生たちのものくらいしか見たことがないから実際のところはわからないが——大人の男性のものというのは、普通、こんなにも大きいものなのだろうか？

養父に引き取られたときには既に一人で風呂に入れる年齢だったから、少年は養父のものすら見たことがない。

畏怖を覚えるほどの長大さに、息を飲んで見入っている自分に気付き、はっと我に返る。

「あの…っ、ちよ……、一回やめ……、やめましょう……、」

言葉の通じる相手でないと薄々わかりつつ、このままでは非常にまずいことが起こりそうで、そんな言葉が口をついて出た。男たちからは言葉が返ってこないどころか、呼吸音すら聞こえない。

埃一つない清廉な社殿に響くのは、狩衣の衣が擦れる音と自分の滑稽な焦り声だけだ。

逃げをうつつ腰を、左右の男たちに押さえられる。

今の自分を、もしもクラスメイトたちが見たらどう思うだろうか。

全裸で脚を大きく広げさせられ、中心にあるまだ幼い竿も排泄孔も丸見えた。

いくらなんでも恥ずかしすぎる。

「ひ……ッ、」

やはりというべきか、男の長大な一物^{いちもつ}は少年の後孔に押し当てられた。

熱された鉄を連想するその滾^{たぎ}りに、おののいた孔が何度もひくつく。

「いや……っ、いや……あ……、」

先を考えるのが怖すぎた。

無我夢中で手足をばたつかせ逃げようとするが、下半身は脚も腰も男たちに捕らえられているし、上半身や枕元にまで男たちが衣服を擦り寄せるように^{かが}屈みこんでいる。逃げ出せるような隙間もなく、もがけばもがくほど、手首の紐が喰い込

むだけだった。

「あ…っ、」

男の怒張した先端部分が、まるで少年の孔との相性を確かめるように、何度も角度を変えて擦りつけられる。後孔の周囲——菊状の襞に、恐ろしいほどの硬さを感じて、先程までとは異質な恐怖が少年を苛んだ。

こんなもの挿入^{はい}るわけがない——。

少年は言葉も継^つげず、青ざめた顔でいやいやと首を振ることしかできなかった。

「んう…っ、！」

みり…っ、と男のものがめり込んでくる。

たった一センチにも満たないであろう挿入に、大きく腰が跳ねる。孔の入り口が、熾火を押し当てられたように熱い。たったそれだけでずっしりとした幹^{みき}全体の質量が察せられて、少年の軀は恐れ^のの為に芯から冷えていく。

「いや…、やめて……、い、…、いや……あ！」